Travel Mystery

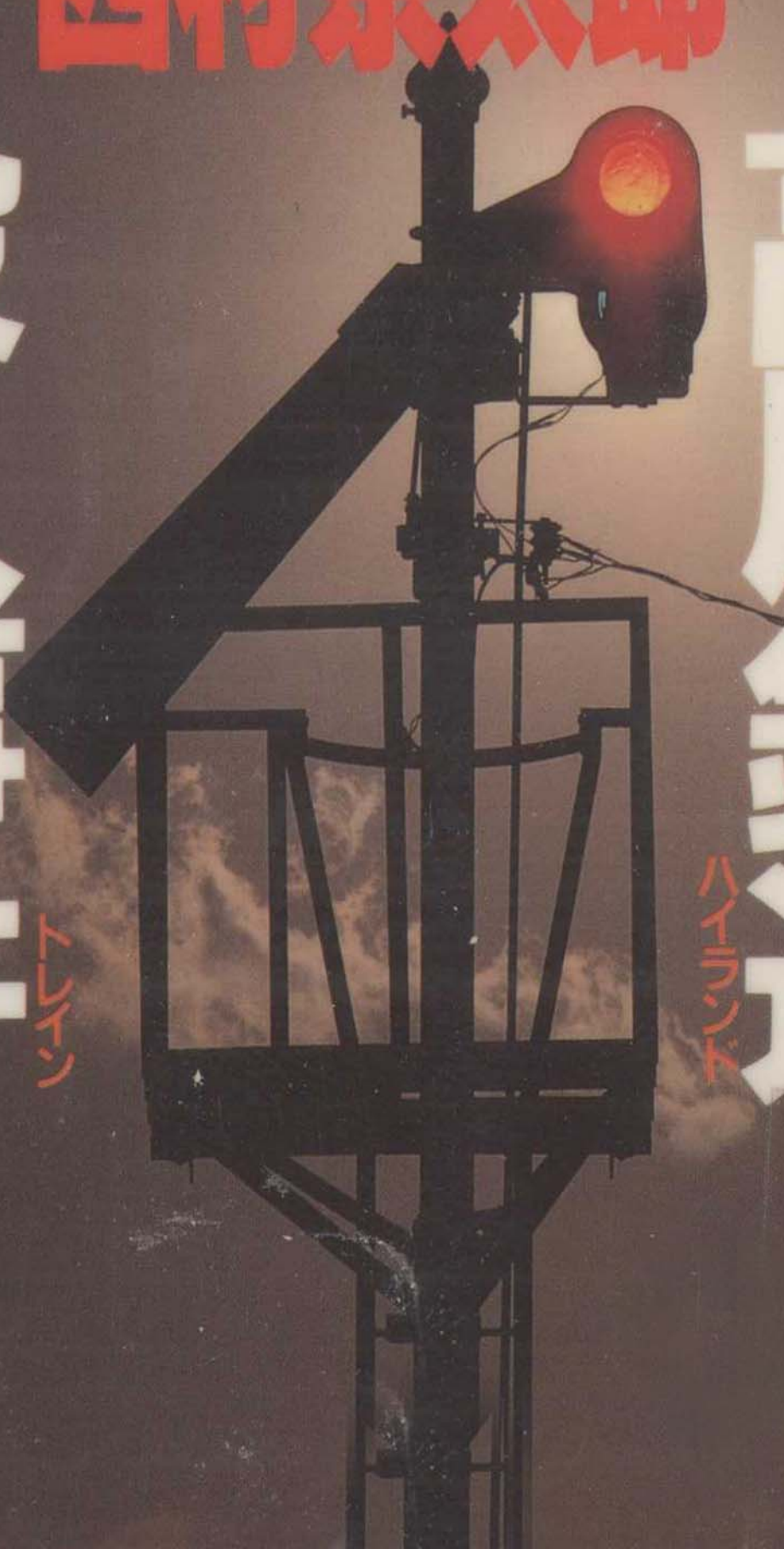
トラベル・ミステリー
傑作集

西村京太郎

highland train

高原鉄道殺人事件

ハイランド トレイン



トラベル・ミステリー傑作集
高原鉄道殺人事件（ハイランド・トレイン）
著者　西村京太郎（にしむらきょうたろう）

1988年2月20日　初版1刷発行
1990年11月15日　　17刷発行

発行者　大坪昌夫
印刷　凸版印刷
製本　榎本製本

発行所　株式会社 光文社
〒112 東京都文京区音羽2-12-13
電話　東京 03(942)2241(代表)
振替　東京 6-115347

© Kyôtarô Nishimura 1988
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-70687-8　Printed in Japan

元文社文庫

トラベル・ミステリー傑作集

高原鉄道殺人事件（ハイランド・トレイン）

西村京太郎

目次

高原鉄道殺人事件　5
おおぞら3号殺人事件　75
振り子電車殺人事件　131
内房線で出会った女
——さざなみ7号　187
殺意の「函館本線」　241
あとがき　西村京太郎　295
解説　新保博久　298

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

高原鉄道殺人事件

1

アルファベットのHの右のタテ棒を信越本線とし、左のタテ棒を中央本線とすると、真ん中の横棒に当たるのが、小諸（こもろ）と、小淵沢（こぶちざわ）とを結ぶ小海（こうみ）線ということになる。

小海線は、全長七八・九キロ。単線で、しかも非電化だから、ディーゼルカーが、ごとごと走る。

急行も、もちろん特急もなく、二、三両連結のディーゼルカーが走るだけのこの線が有名なのは、日本で、一番高いところを走る列車だからである。

日本で、一番高いところにある国鉄の駅は、標高一三四五メートルの野辺山駅だが、この野辺山は、小海線にある。その他、二位の清里（一二七四メートル）、三位の甲斐（かい）大泉（一一五八メートル）など、九位までの駅が、すべて、この小海線である。

そのため、小海線は、別名、高原鉄道とも呼ばれている。

中央線の小淵沢で、小海線に乗りかえると、列車は、左手に、雄大な八ケ岳連峰を見ながら、走る。

赤岳（二八九九メートル）以下、硫黄岳、横岳、権現岳、編笠（あみがさ）山など、二〇〇〇メートルクラスの山が、夏でも、雪を頂いて、眼の前につらなるのだ。

小淵沢から四つ目の野辺山は、ペンションの多いところで、シーズンには、観光客で賑やか

になる。
また、ここには、本物のＳＬや、本物の客車をそのまま使ったＳＬホテルがある。
鉄道ファンの亀井刑事の息子、健一は、前から、このＳＬホテルに泊まりたがっていた。
日本で、一番高い駅で降り、ＳＬホテルに泊まることである。
健一は、その時に連れて行ってくれと、父親に頼んだが、刑事という仕事は、約束しても、事件が起これば、旅行どころではなくなってしまう。
ちょうど十月には運動会の振替え休日から「体育の日」までの八、九、十日が小学校は三連休になる。健一にはまたとない旅行のチャンスだった。
そこで、亀井は、親戚の娘で、女子大生の井上由紀に、健一を連れて行ってくれるように、頼んだ。
「いいわ」
と、由紀は、あっさり承知してくれたが、すぐ、言葉を続けて、
「私ね、今年の冬休みまでに、アルバイトをしてスキー旅行のお金を貯めるつもりだったの。健ちゃんの子守りをする間は当然、アルバイトは出来なくなるわ」
「健一は、もう六年生だから、いつも、一緒にいてくれなくても大丈夫だよ」
「でも、アルバイトは、出来ないわ」
「それは、そうだが」
「一日五千円になるアルバイトがあったの。三日で、一万五千円だわ」

「つまり、その損害を、私に、持ってくれというんだろう？」
「伯父さんだから、三千円にまけとくわ。三日分の日当として、九千円、それに、もちろん、交通費やＳＬホテルの宿泊費なんかもね」
「わかったよ」
亀井は、苦笑して、銀行から、五万円ばかりおろしてきて、それを由紀に渡し、健一にも、別に一万円渡して、十月八日に、送り出した。
その日の夜おそく、健一から電話が入った。
小海線の野辺山に着き、ＳＬホテルに入ったというのである。
「由紀はどうしている？」
亀井がきくと、健一は、
「疲れたって、もう、寝ちゃってるよ」
と、いった。
この時点で、亀井は、由紀のことは、心配していなかった。
もう二十一歳になっているし、ひとりで旅行するようだったし、どちらかといえば気の強いほうだったからである。
健一は、身体（からだ）は大きいが、何といっても、まだ、小学六年生だった。
「今日、カブト虫を二匹つかまえたよ。すごく大きいんだ――」
健一は、それだけいって電話を切った。そっけない、いかにも、男の子の電話だったが、そ

れでも、楽しんでいることだけはわかって、亀井は、ほっとした。
翌九日の午後四時頃、警視庁にいた亀井に、電話が、かかった。
「長野から、お電話です」
という交換手の声で、ああ、健一からだなとわかったが、なぜ、警視庁にいる亀井に回してきたのか、とっさに、判断がつかなかった。家には、妻がいるはずだったからである。
「もし、もし」
と亀井がいうと「パパッ」と、健一の甲高い声が、飛び込んで来た。
「お姉ちゃんが、死んじゃったよ！」

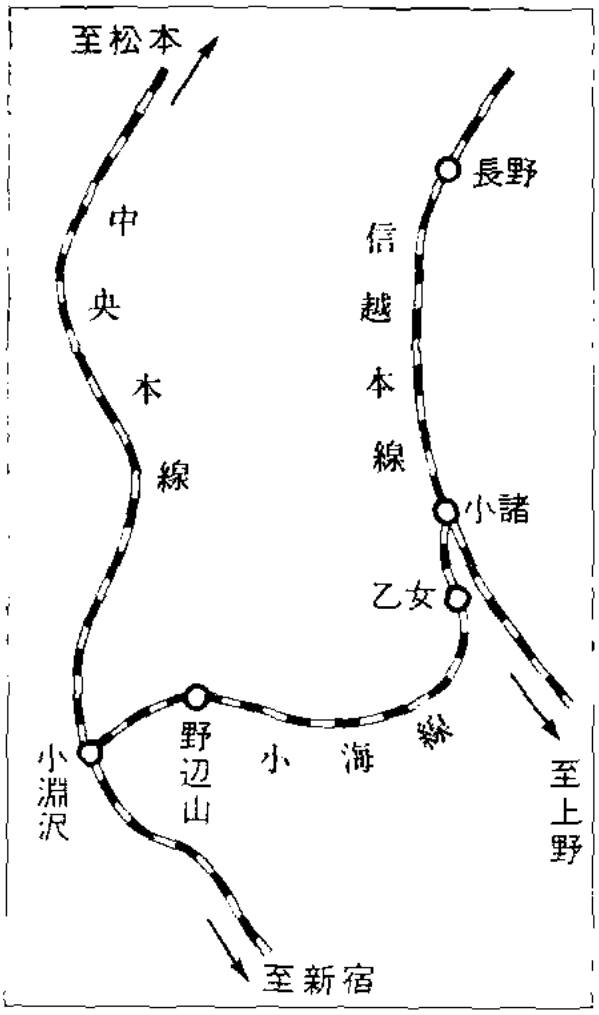
2

「死んだ？　どうしたんだ？」
亀井は、わけのわからない質問の仕方をした。死んだという言葉は、聞いたのに、こんなときには、その言葉が、ただの音としか聞こえなかった。
「死んじゃった」
と、また、健一がいった。
「くわしく、話してみろ」
「今朝、食事をしたあとで、お姉ちゃんが、ちょっと、出かけてくるといったんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「どこへ行くといってた？」
「知らない。教えてくれなかった」
「それから？」
「僕は、だから、ひとりで、貸自転車に乗って、踏切へ、写真を撮りに行ったんだ」
「踏切？」
「国鉄で一番高いところだよ。野辺山駅から二キロほど行ったところに、小海線の踏切があって、そこが一三七五メートルで、一番高いんだ」
「由紀は、その踏切で死んだのか？」
「違うよ。踏切は、僕が、写真に撮ってきたんだ」
健一の話は、なかなか、焦点が定まってこない。小学生だから、仕方がないとは思っても、思わず、腹が立って、
「じゃあ、どこで死んだんだ！」
と、つい、怒鳴ってしまった。
「写真を撮って、ホテルへ戻って、それから、警察の人が来たんだ。井上由紀って人を知ってるかってきくから、知ってるっていったら、乙女（おとめ）駅で死んだって、教えられたんだよ」
「乙女？」
「小海線に、そういう名前の駅があるんだよ。そこで、死んだっていうんだ」
「死因は、何なんだ？」

「シイン？」
「死んだ原因だよ。列車に、はねられでもしたのか？」
亀井が、大声できくと、電話の向こうで、急に、声が変わった。
健一の声から、大人になって、
「長野県警の林といいます」
と、いった。
「私は、警視庁の亀井ですが、何か事件なんですか？」
「殺人事件です。乙女駅のホームで、井上由紀さんが、殺されました」
「誰に、どんな方法で、殺されたんですか？」



「犯人は、まだ、見当もつきません。井上由紀さんは、射殺されました」
「射殺？　銃で射たれたんですか？」
「そうです」
「なぜ、そんなことに――」
亀井は、思わず、絶句してしまった。
（健一と一緒に行ってくれと頼んでなければ、こんな目にあわなくてもすんだのではないか？）

亀井が、最初に考えたのは、そのことだった。
「遺体は、どこにあるんですか？」
と、亀井は、きいた。
「小諸署です。小諸署に、捜査本部が置かれると思います」
「とにかく、すぐ、そちらへ行きます」
亀井は、捜査一課長に、特別に許可を貰い、その日のうちに、上野から、信越本線に乗った。
一八時〇〇分上野発のL特急「あさま21号」に乗った。
座席に腰を下ろしてから、時刻表を開いて、乙女駅を探した。
小海線の駅だが、野辺山とは、反対方向で、小諸の二つ手前である。
SLホテルのある野辺山から、小海線で、一時間五十六分かかる小さな駅だった。こんなところに、由紀は、何をしに行ったのだろうか？
「乙女」という、いかにもロマンチックな名前につられたのだろうか？
小諸に着いたのは、二〇時二七分。すでに暗くなっていた。
改札口を出ると、電話をくれた長野県警の林刑事が、迎えに来てくれていた。
「井上由紀さんのご両親も、間もなく見えると思います」
と、林は、警察署に案内しながら、亀井にいった。
「そうですか」
亀井は、自然に、気が重くなってくる。

「息子さんも、野辺山から、こちらへ来てもらっています。ひとりでは、心細いだろうと思いましてね」
「いろいろと、気を遣っていただいて、ありがとうございます」
亀井は、頭を下げた。
「射殺事件というのは、珍しいので、こちらでも、驚いています」
「そうでしょうね。乙女駅というのは、どんな駅なんですか？」
「小さな無人駅ですよ」
「そうですか。小さな駅ですか」
「ただ、名前がロマンチックなので、若い女性に人気があります。小諸を、『娘貰』と読ませて『娘貰』から、『男答女』というわけで、縁談が成立するというめでたい切符ということで、売り出しています。なかなか人気があって、よく切符が売れたようですが、最近は、それほどではなくなったみたいですね」
と林は、いう。
（由紀は、何しに、乙女駅に行ったのだろうか？）
亀井は、歩きながら、考え込んでしまった。
妹夫婦の娘だが、さほど、しげしげと、会っていたわけではない。だから、由紀が、どんな生活を送り、どんな友人とつき合っていたか、亀井には、わからない。
（誰かと、乙女駅で、デイトの約束をしていて、殺されたのだろうか？）

小諸署に着くと、亀井は、まず、署長にあいさつしてから、由紀の遺体に、対面した。

3

白布に蔽(おお)われた遺体は、眠っているように見えた。が、ワンピースの胸のあたりが、血で染まっていた。その血は、乾いて、赤黒く変色している。

「ご両親が間もなく、到着されるというので、そのあとで、解剖に回すつもりでいます」

と林刑事が、いった。

「弾丸は、どんなものが、使われたんですか？」

亀井は、手を合わせてから、林にきいた。

「傷痕から見て、三十八口径の拳銃で射たれたと考えていますが、肝心の弾丸が、見つからないのです」

「すると、弾丸は、貫通しているわけですか？」

「そうです。背中をごらんになると、貫通していることがわかります」

「すると、かなり至近距離から、射たれたことになりますね？」

「われわれも、そう考えています。ただ、貫通した弾丸が、まだ見つかっていないので、拳銃の種類も、わかっていません」

「そのほかに、何かわかっていることはないんですか？」

「被害者は、ホームの端、小淵沢寄りに、俯せに倒れているところを、発見されました。時刻は、十一時四十五分頃と思われます。一一時五三分に、乙女駅を発車して、小淵沢へ行く上り列車がありまして、それに乗るために、乙女駅へ来た東京の若い女性の二人連れが、ホームに倒れている被害者を見つけたというわけです」

「すると、十一時四十五分までの間に、殺されたことになりますね」

「そうです。もう一つ、亀井さんの息子さんの証言では、被害者は、朝の七時半に朝食をすませ、八時には、ホテルを出ています。とすると、八時一五分野辺山発の下り小諸行きの列車に乗ったと思われます。この列車の乙女駅着は、一〇時〇二分です」

「ちょっと待って下さい」

と、亀井は、相手を手で制して、

「彼女は十時二分に、乙女駅に着いて、十一時四十五分までの間に、ホームで殺されたわけですね？」

「そうです」

「その間、一時間四十三分もありますよ」

「わかっています。その間に、被害者を見た者はいなかったのかということですね？」

「そうです」

「そこが問題なのです。時刻表を見ていただくとわかりますが、乙女駅に停まる列車は、一〇時〇二分の下りの次は、こうなります」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com